

## アフリカの人々と名付け 38

### 男児に再来した女性祖先と名付け

小馬 徹

「妻の息子」が父称となる別の例

前回は、西南ケニアのキプシギスでは、女性婚 (woman marriage) によって生まれた男児には、イニシエーションを済ませた後、arap Chepkwony、またはarap Chebiosetという父称を与える事、またその各々が、「妻の息子」、「女の息子」と訳せる事を紹介した。ところが、実はこの他にも、別の理由からも arap Chepkwony という父称が与えられる例が知られている。

以前に述べた通り、キプシギスには、「再受肉」あるいは靈魂の再来の思想がある。そして新生児へとやって来てその魂と化すのは、大概、父系の同性の祖先、つまり父の父母または父の父の兄弟か姉妹の霊である。男性祖先の霊が女児に再来した例は全く知られていない。一方、稀ながら、女性の父系祖先、つまり父方の祖母、または父方の祖父の姉妹の霊が男児に再来した例がある。男性祖先の名前を呼び上げつつ再来した霊の同定を繰り返し試みても、霊の側が、つまり赤ん坊がどうしても嘯によって応答しない場合、仕方なく上記のような祖先の名前が呼び上げられるのである。そして、その時に体内の祖霊から嘯による応答が得られた場合に、この男児の祖霊名は arap Chepkwony となる。

*Chep-* は女性を指す接頭辞であり、*kwony* は妻または成女を指す名詞である *kwondo* の不定形だ。女性接頭辞 *Chep-* は、この例のように男性接頭辞である *Kip-* に代わって用いられる場合には、何らかの奇異性を合意している。したがって、男児の名前としての Chepkwony は、「ある女性 (妻) が再来した男の子」あるいは「ある女 (妻)」そのものを意味している。

そして、Chepkwony という (正式の幼名である) 祖霊名を貰った男性の息子たちは、イニシ

エーションを終えると、父親の幼名に因んで arap Chepkwony という父称を貰う。通例キプシギスの父称は、父親の粥名 (幼名の一つ) である Kip-X から派生して、arap X という形になる。だが、arap Chepkwony の場合は、父親の粥名を基にいない点でも、また接頭辞をそのまま父称の中に残す点でも原則から外れている。

「薪を背負わぬ者」

父系の女性祖先の霊が男の赤ん坊に再来した場合でも、この子の祖霊名が Chepkwony ではなく、Marakwen とされる場合が往々ある。Marakwen は、*ma* (否定辞)、*ra* (担ぐ)、*kwen* <-*net*> (薪) という成分からなる合成語であり、「薪を背負わぬ者」を意味している。

フェミニズム人類学派には、「生産資源をめぐる男女間の競争が増大した成果として植民地時代のある時期にそうなるまでは、男性優位がキプシギスの卓越した特徴である事はなかった」という見解がある [Sorensen, A., "Women's Organizations among the Kipsigis", *Africa* 62(4), 1993]。ここでは詳しく論じられないのだが、実は、Marakwen という名前だけでも十分にその反証となり得る。と言うのも、この名前は、今際の時に、薪運びを初めとする苦役を生涯甘受し通した女性としての自らの苛酷な境遇を慨嘆し、次の世は男性に生まれ変わると遺言した女性の再来を記念するものだからだ。

「姻族の息子」という父称

因みに、祖霊名のもう一つの例外として、ある男性の母方親族の男性祖先が男児に再来した事を示すものがある。つまり、母の父かその兄弟の霊が男児に再来するという稀な場合に付け

られる名前である。この場合、男児の祖霊名は Kapketwony、つまり「姻族」となり、彼の息子の父称は arap Kapketwony となる。

前回論じたように、女性婚の結果生まれた息子たちには、arap Chepkwony（「妻の息子」）、または arap Chebioset（「女の息子」）という父称が与えられる。また未婚のまま家に残された娘が産んだ息子たちには、arap Bosuben（「薪の女の息子」）という父称が与えられる。これらの名前は集合的で、且つ非個人的でもあるから、「擬父称」と名付けるのが相応しいと述べた。そしてこれらと同様の匿名性は、今回報告した arap Chepkwony や arap Kapketwony という祖霊名についても指摘できるのである。

### 「捕虜の息子」という父称

つまり、父系のキプシギス社会においては、女性や姻族の個人名は、父称ばかりでなく祖霊名によっても記念される事はない。それは、前々回に述べた事情によるだろう。つまり、私（男性）がイニシエーションを終えて父称（patronym）を授けられると、その時に初めて名前（kainet）の「二重螺旋構造」は接点を得、祖父から私へと続く名前の系が私の父から私の孫息子へと続く名前の系に連結され、統合されるからである。

他氏族から婚入して来る女性という存在は、キプシギスの全体社会の成員であるという点では内部の者であっても、夫の氏族にとっては何時まで経っても某かの外部的な属性を留めており、この意味でいわば「内なる余所者」なのである。つまり、彼女の他者性はそのまま姻族の他者性に通じているのだ。

帰化人の他者性も、こうした「内なる他者」としての女性や姻族の他者性に比肩できる。かつては、戦いに出た折りに、グシイやマサイなどの近隣民族の少年を家に連れ帰り、養取儀礼を行って帰化させ、自分の息子とする事が行われていた。だがそれは、主に自分の「妻の家」の一つに嗣子たる男児がない人物が取る緊急非

難的な行為で、必ずしも一般的ではなかった。

さて、帰化人はその事情のいかんを問わず、「連れて来られた者」を意味する Chelule という名前を与えられる。そして、「連れて来られた者」の息子たちは、イニシエーションを済ませると arap Chelule、つまり「連れて来られた者の息子」という集合的で非個人的な父称で呼ばれるのである。

実は、何らかの理由で嗣子となるべき男児が得られなかった「妻の家」には、未婚のまま娘を一人家に残して子供を産ませるか、あるいは女性婚という手段に訴える他に、他民族の少年、あるいは青年を養取するという方法も残されている。そして実際、今日でも arap Chelule（「連れて来られた者の息子」）ばかりでなく、chelule（「連れて来られた者」）と呼ばれる人物が少なからず存在する。

### 女性の地位の限界

確かに、女性が婚入と共に夫の氏族に移籍＝編入され、それと同時に擬似子称を与えられる点でも（連載第33、34、35回）、また家財産制によって半ば経済的な自立を望まれる点でも（連載第34、37回）、キプシギスの女性の地位は構造的に高いと言える側面を持っている。

しかしながら、父称においてばかりでなく、祖霊名においても女性の個人名が記念されて受け継がれて行く事はない。つまり女性は、比較的女性に寛大な構造を持つキプシギス社会であっても、それが父系原理によって統合される社会である以上、せいぜい「内なる他者」としての地位を確保するに止まると言えるだろう。

以上の事情は、キプシギスには女性を始祖とする氏族やその分枝が少なくない事実と、それらが他の多くの氏族とは異なって、始祖名に因む名称を持たない事を同時に説明する。女性が交換の客体であるがゆえに家内的な存在であり、男性がその主体として公的な存在であるという大きな枠組みは、まだ動いていないのだ。

（こんま とおる 神奈川大学）